

## 二〇一三年度 入学試験問題

法学部A方式II日程・国際文化学部A方式・キャリアデザイン学部A方式

## 二限 国 語 (60分)

## 〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

マークシート解答方法についての注意

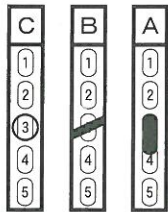
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。



(一) 正しいマークの例

(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

農業は、文化としての側面を強くもっている。現在ではあたりまえのことのようだが、第二次世界大戦以降六五年間、このことは、あまり認識されてこなかった。この時代は、農業を「近代化」することだけが<sup>1</sup>、第一の目標としてかけられてきたからである。実は、この時代の農業の「近代化」には、二つの側面があった、と考える。一つは、工業化の側面であり、もう一つは、市場経済化の側面である。市場経済化と工業化は、時にはそれぞれが独自に、時には両方が手をたずさえて、日本の農業の「近代化」を推し進めてきたことになる。

農業の「近代化」は、わたしたちの生活に、多くの利点をもたらした。しかし、同時に多くの弊害をもたらすことになった。そこには、どのような問題点があったのだろうか。

たとえば、現代における市場経済システムは、工業製品をあつかうことに適したように作り上げられたシステムである。市場経済システムが、工業製品の流通を前提としているために、農産物もまた、工業製品をモデルとした経済システムに対応するように変形せざるを得なかった。農産物の工業製品への変形ということは、農業にとって、いったいどういう意味をもっているのだろうか。食料と生命の、質と内容が問題になっている今こそ、もう一度本来の意味を問い返す必要がでてきた。

A、農業や農産物は、工業や工業製品とは異なる側面、さまざまな農業独自の特色をもっている。<sup>2</sup>「文化として農業を考えてみる」ということは、農業や農産物のもつこのような独特な性質について、その意味を考えてみるということでもある。

農業は、もともと、狩猟や採集をきっかけとして始められてきた。人間は、野生の植物や動物に出会い、それらを食料として、生活を維持し続けてきた。野生植物との長いつきあいがあり、野生動物との長いつきあいがある。長い時間をかけての相互関係を経て、ようやく農業や牧畜が生み出されてきた。

人間が農業を始めること、それは人間が自然の中に埋没している状態からの、自然から離脱を開始する最初の一步であった。

それまで人間は、自然の力にすべてを依存して、自分たちの生命と生活とをかたちづくってきたのである。また、そのことを充分に自覚していたがゆえに、自然を畏敬し、畏怖さえしていた。自然の中に埋没すること、自然から離脱を開始することの間には大きな落差がある。それだからこそ、世界中のさまざまな神話や宗教は、農作物が生み出されることの奇跡は、人間と自然、ないしは人間と神との関係性の中にあつたこと、あるいは農作物の成長が、人間と自然との密接な関係性の中に存在していること、を豊かに物語っている。

実際、世界中のさまざまな自然環境の中で、異なる大陸の中から、トウモロコシやシコクビエや米や小麦などの多様な農作物が生み出されてきた。農産物が創出されたのは、ヨーロッパだけでない。アジアや、アメリカや、アフリカにおいても、多様な農作物が生み出され、それぞれの地域環境は農作物にとつての豊かなゆりかごだったのである。生み出された多様な農作物は、それを生み出した自然環境と、常に密接に結びついていた。

B

、人間の側も、まわりの自然環境をうまく利用することによって、農作物を育てあげる技術の体系を作り上げてきた。こうした時代が、数千年も続いてきたことになる。そして、自然と人間とを結ぶこの関係は、基本的には、現在も存続しているものとわたしは考える。

文化としての農業とは、こうした自然環境と農業技術と人間の社会のしくみが、一体となつて作り出してきたものである。さまざまな自然環境のもと、さまざまな農耕の形態があり、農業技術の伝統があり、工夫がある。それは全体として、人間の食料と生命を持続させ、存続するために積み重ねられてきた、技術や工夫であつた。植物自身にも生命体として

X

性があるように、それを持続的に継続していくための工夫としての農業技術にも

X

性があり、それに対応して社会の編成の仕方も異なつていたのである。かつて、<sup>\*</sup>ウイットフォージェルは水利社会の特色を論じ、<sup>\*</sup>和辻哲郎は西洋と東洋の農耕の違いを論じ、<sup>\*</sup>梅棹忠夫は西洋と東洋と中洋の世界を比較して論じた。

C

、つい最近になって、この長年続いてきた農業の文化、牧畜の文化は、大きく様変わりするようになってきた。

西ヨーロッパにヒマワリ畑やトウモロコシ畑が続き、ブラジルに大豆畑がひろがり、日本では裏作作物をもたない水田稲作一辺倒になつてしまつていた(少なくとも、ここ一〇年の応急的な転作作物の生産を別にすれば、日本の水田は歴史上最も単作

化してしまっている)。これらは、いずれも農業の市場経済化がもたらした現象だと、わたしは考えている。

農業の市場経済化は、さらに農産物だけでなく農業生産の過程そのものが、工業製品の生産の過程と同じような形態をとることを要求していった。たとえば、生命あるものは、どれもが少しづつ形が異なっているものである。大きいものもあれば、少し小さいものもある。長いものもあれば、細いものもあり、少しいびつな形のものもある。生命体のもっている多様性が、そうさせるのである。それにもかかわらず、工業製品を生み出してきた経済システムは、農産物にも工業製品と同じ「同一の形態」の商品を供給することを要求する。同一の形態の農産物に合理性を見出し、工業製品のように品質管理し、経済効率をあげていくことを最重要視する。これは、市場経済システムが、工業製品の前提となっている、同じ大きさの、同じ色の、同じ形の商品を提供することに、対応して発達してきた経済システムであるからだ。このため、同じ論理が農産物を作ることも要求されてくる。市場経済システムでは、傷一つない、虫喰いのない、同じ大きさの、工業製品のような農産物が求められる。さらに、どのような季節であっても、必要に応じて、需要に見合った形の農産物を生産することが、要求されるのである。<sup>4</sup> こうした論理を生み出す経済合理性の行き着くところに、いったいわれわれは、どのような社会を作り上げ、どのような食料を食べ、その基盤として、どのような農業を営んでいくことになるのだろうか。現在は、社会そのものの大きな転換点に立っているように思える。

このような問題を、人類の歴史の全体の中で、もう一度根底からよく考え直してみる必要があるだろう。それは、近代文明の中で、特に日本という文明の中で、農業をどのように位置づけ直すか、地域社会はどのように位置づけていくのか。その具体例をよく知るとともに、新しい座標軸を構築していくことにほかならない。

(末原達郎「文化としての農業 文明としての食料」より。文章を一部改変した)

【注】 \* ウィットフォーゲル ドイツ生まれの、アメリカのアジア史研究者（一八九六～一九八八）。

\* 和辻哲郎 日本の風土や精神を研究したことで知られる哲学者・倫理学者（一八八九～一九六〇）。

\* 梅棹忠夫 世界各地の人々の文明を調査、比較したことで知られる民族学者・比較文明学者（一九二〇～二〇一〇）。

問一 傍線部「農業を「近代化」すること」とは、本文ではどのようなこととして論じられているか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 農産物を工業製品並みに競争力ある商品として生産できるようにすること。
- イ 市場経済システムに適合する農産物を効率よく生産できるようにすること。
- ウ 機械を多用して生産効率を上げ、農産物の価格を抑えて競争力を高めること。
- エ 農産物を工業製品の生産にならって工場生産し、その完成度を高めること。
- オ 市場経済化を進めるために、農産物の市場取引のシステムを整備すること。

問二 空欄 A C に入る接続表現として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- |   |      |   |      |   |       |   |      |   |      |
|---|------|---|------|---|-------|---|------|---|------|
| A | だから  | イ | なお   | ウ | ともすれば | エ | いっぽう | オ | もしくは |
| B | ところが | イ | はたして | ウ | また    | エ | ただし  | オ | つまり  |
| C | かつ   | イ | すなわち | ウ | そこで   | エ | しかし  | オ | たとえば |

問三 傍線部2「文化として農業を考えてみる」ということ」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 近代的な工業には見出し得ない豊かな精神性をもつものとして、農業を考えてみるということ。
- イ 人間が野生植物に手を加えて発達させたという側面に留意して、農業を考えてみるということ。
- ウ 将来、創造的価値を生み出す大きな可能性を秘めたものとして、農業を考えてみるということ。
- エ 各地の社会的条件に応じて技術を体系化してきたことに着目して、農業を考えてみるということ。
- オ 地域環境に応じて異なる様式や文明を形成してきた点に注目して、農業を考えてみるということ。

問四 傍線部3「人間が自然の中に埋没している状態」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 人間が、自らの命と暮らしを自然に左右されるがまま、その力を恐れ崇めている状態。
- イ 人間が、自然界において野生動物同然に生命を維持し、それを意識していない状態。
- ウ 人間が自然の厳しさを十分に認識し、自然に抗いながらも依存して生きている状態。
- エ 人間が、野生の動植物に自らの生命が委ねられていることに気付いていない状態。
- オ 人間が自然を畏敬しながら、それを司る神に生命を預けていると考えている状態。

問五 空欄

X

に共通して入る語として最も適切なものを本文中から抜き出し、解答欄に記せ。

問六 傍線部4「こうした論理」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 農産物の画一化を追求するあまりに、それにかかる経費を度外視する論理。
- イ 農業生産の過程を機械化・工業化することを、なによりも重要視する論理。
- ウ 農産物の生産・供給を効率化して市場の要求を満たすことを最優先する論理。
- エ 農産物の質を維持するため、生産過程を厳しく監視することを肯定する論理。
- オ 大量の不良品を廃棄することも厭わず、農産物の品質を厳しく管理する論理。

問七 筆者は本文において「近代化」が進んだ現代の農業のどのような点を問題視しているか。「文化」という語を用いずに、つぎの形式に従って三十字以上、四十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

現代の農業が、

という点。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

歴史学では真実は求めるが、真理というものを究めていこうとしているのだろうか。ちょっと変な問題提起であるようだが、私としては気になるので、すこし考察してみようと思う。

まず、真理も真実も英語ではともに truth となり、ことば自体に区別はないようである。しかし、<sup>1</sup>真理と真実とはほんとうに同じ概念なのだろうか。

真実というのは、真相といってもいいし、単に真といってもいい。要するに、ほんとうのこと、ほんとうの姿・状況という場合を指して使われることばにはかならない。ここには、そのものの現にある姿・状況が真をうつしているかどうかの問題とされているのみで、なぜに、そこにそうあるのか、理(すじみち・ことわり)を立てた説明が求められているわけではない。また、普遍的である必要もない。これに対し、真理とはまさにその理の存在と普遍性こそが重視されているのではないか。すなわち、真理とは、なによりも真と思われるものが、なぜ、そこにそうあるのか、その理を追究し、そして得られた真の理でなければならぬ。

さて、それではこうした真理というものを歴史学は究めていこうとしているのだろうか。

歴史学というのは、人間の営みと、それによってつくられたもろもろの制度や思想・生産基盤・技術・文化などの生成・発展・消滅の様子を明らかにし、それら相互の関係や過程を知ろうとする学問である。こうした歴史学においてまず大事となってくるものは、真実の追求である。真実を知らなければ、そこから先どんな思考を進めるにしても、それはきわめて不十分かつ不確かなものとならざるをえない。

さて、歴史における真理の探究というのがあるとなれば、それは、とりあえずは次のように説明しなければなるまい。すなわち、過去の人々の営みの中に真実を探り、その真実を合理的に説明する真の理を組み立てるのだ、と。

しかし、そもそも、歴史学においてこのような真理の探究は可能なのか。また、それはほんとうに目指すべき課題となるの



だろうか。このことは、二〇世紀最後の一〇年間ほどの間におきた社会主義世界体制の崩壊、マルクス主義的歴史観の權威失墜という歴史的な現実によってとりわけきびしく問いなおされているといっている。

<sup>2</sup> 戦後日本における歴史学の実際をふりかえってみるとき、そこでは、まずなによりも過去にあった事実の正確な確認という作業が求められていた。とりわけ、戦時中の皇国史観によって極端にゆがめられていた歴史的事実の見直しがすすめられ、また史料の探求とともに新しい歴史的事実の発見があいついだ。歴史の発展をささえてきたものに対する認識も大きく変えられてきた。

歴史は天皇や官僚あるいは力のある階級・階層の人たちだけによって形づくられてきたのではなく、原始時代から階級社会が誕生し、やがて再び階級のない社会を生み出していくものだという認識に役立つような歴史的事実がつぎつぎと発見されていった。というよりも、歴史的事実の発見は、それが進めば進むほど右に見た歴史的真理の存在を証明するものと評価されたのである。

しかし、こうした中で歴史の発展方向に対する「真理」や「理論」が存在し、あらゆる歴史的知識がその正しさの証明ないしは見解の相違に関する論争に供され、それとの関係でその価値が評価されることとなつていったのも事実であった。歴史学の探究課題はある意味で限定され、せまかつたし、「歴史的真理」の存在、その追究の可能性について疑いをはさむことは、まことに勇気のいることでもあった。

こうした学問的状況の下では、「歴史的真理」をめぐる論争に参加する、あるいは参加できることに歴史学の価値が見出され、それに直接つながらない歴史的事実あるいは歴史の真実を知ることが、歴史学の世界では、非本質的で、第二義的な興味に陥るものとみなされ、それに時間の大部分を費やす人は「実証主義者」<sup>3</sup>とみなされるのではないかというおそれが生じたとしても無理のないことであつた。

もちろん、ベシミステイクなものであれ、別の筋道であれ、「歴史の真理」に対する否定的な見方も種々形成されている。

それは、一種のアンチテーゼでもあったが、第一義的課題としての「歴史の真理」探究自体を否定するものではなかつた。

この「歴史の真理」探究がいまや權威を失っているのである。歴史の発展性に対する認識も、また歴史的評価の価値基準もあわせてゆれている。「自虐史観批判」を旗印とする歴史修正主義が猛威をふるうのも、こうした状況を基盤としていることはまちがいない。「歴史の真理」探究というのは、いまや目指されるべきものなのか、どうなのか。再度基本に立ちかえって考えなおされなければならないのである。

私は、過去の事実を知ること、およびそこから見えてくる歴史の中の真実を正しく認識することの重要性を確認することが第一だと思う。そして、なにが大事な事実なのか、多様な歴史の動きを相互に評価しうる広い視野を確立しなければならぬと思う。

本質的なもの、大事な真実は、無数にある多様な事実を通して見えてくるものであることを理解しなければならない。説明不能な事実というものは存在してはならない。本質的なもの、大事な真実を理解しようとするとき、無数の事実を考慮し、それをきちんと位置づける検討を重ねなければ、結局それを見失ってしまうであろう。

「歴史の真理」を求めると称して、その限定された課題に関する事実のみを歴史の中の本質的な事実とし、他を第二義的に位置づけてきた過ちをくりかえすべきではない。歴史の真理から歴史が見えるのではなく、事実と真実を検討することの中に歴史の動きが見えるのでなければならぬ。「歴史の真理」があるとすれば、それはまさしくそうした努力の上にはじめて存在しうるものというべきである。

「歴史の真理」というのは、いかなるものなのか。こうした努力を積み重ねつつ、あらためて検討していかねばなるまい。

ところで、ここに困ったことがひとつある。すなわち、過去の出来事ともなると、多くの重要な事実がわからなくなっているということである。また、研究者の不注意や怠慢によって誤ったままの認識がまかりとおっていることもある。

もちろん、事実の確認は、史料となるべき過去の文書や記録あるいは物や遺構の研究から始めねばならない。どうすればそれらから重要な歴史的事実を見つけ出すことができるか。実は、こここのところの検討が大事なのではないかと思う。

まず、過去の遺物や遺跡、文書・記録なども、そうした事実を解明できたとき、はじめて史料として評価できることを確認

しておきたい。あらかじめ、絶対的な史料<sup>4</sup>というものが存在しているわけではないのである。われわれの眼前にあるそれらのものは、どのような歴史的事実を明らかにしてくれるのか。これを発見し、検討することこそが歴史学者のつとめでなければならぬ。また、そのときどのような歴史的真実を見つけ出すか。ここに歴史学者としての感性があることを知らねばならぬ。

歴史的真実というのは、個々の事実のみではなく、それらをとおして存在しているものである。その発見は、歴史の発見に直結するものであるけれども、簡単に見えてくるものでもない。どうやってこれを見つけ出すか。

歴史的真実というのは、史料の語る事実謙虚に耳を傾けているとき、そして、その事実が普通の歴史観と照らしあわせたとき、<sup>②</sup>どうも釈然としない感じを受けるときが発見のチャンスだと思う。「事実とは小説よりも奇なり」とは、よくいわれることばであるが、歴史的真実というのも、われわれの確立した歴史観よりもはるかに奇なるときが多いのである。

(小田康徳「歴史学研究と真理の不探究」より)

【注】 \* マルクス主義

資本主義社会の矛盾を指摘し、労働者階級を解放して、社会主義社会を実現するための階級闘争を主張する思想。

\* 皇国史観

天皇による国家統治を日本の歴史の特色とする歴史観。

\* ペシミステイック

悲観的。

\* アンチテーゼ

反対の意見、対立する理論。

\* 遺構

古い建築物やそのあと。遺跡。

問一 傍線部1「真理と真実とはほんとうに同じ概念なのだろうか」とあるが、筆者の考える「真理」と「真実」とはそれぞれのようなものか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 真理はそのものが現実に存在していることをいうのに対し、真実は現にある姿・状況をうつしていることをいう。

イ 真理はその存在の理の説明が可能なのであるのに対し、真実はその説明が不可能なものである。

ウ 真理はなぜ真であるかが理を立てて説明された普遍的なものを指すのに対し、真実は単に真であることを指す。

エ 真理は普遍的なことを意味するのに対し、真実は個別的なことを意味する。

オ 真理は全ての人が納得するものをいうのに対し、真実は必ずしも多くの人の賛同を得られるものをいうとはかぎらない。

問二 傍線部2「戦後日本における歴史学の実際」とあるが、筆者は戦後の日本の歴史学の展開をどのように考えているか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 戦後の歴史学においては、階級社会の消長についての関心が深まり、戦時中にゆがめられた歴史的事実が多く見直されたが、真実を追求する姿勢が厳格であったため歴史研究を窮屈でせまくなるしいものとした。

イ 戦後の歴史学においては、マルクス主義的歴史観のもとで多くの発見がなされたが、社会主義体制の崩壊の影響でその学問的権威が失墜し、悲観的雰囲気の中で戦前と同様の歴史観が復活してきた。

ウ 戦後の歴史学においては、多様な歴史的事実の発見があいつぎ、その事実の集積のなかから「歴史的真理」が見出されたが、それは戦時中に極端に単純化された歴史的事実の見直しにはつながらなかった。

エ 戦後の歴史学においては、戦時中に極端にゆがめられていた歴史的事実の見直しが進められて多くの発見があったが、「歴史的真理」の探究を重視するあまり逆に歴史学の研究課題を限定し、せばめた。

オ 戦後の歴史学においては、戦前の国家体制を合理化するための歴史認識が見直されて多くの発見があったが、歴史の発展性に対する認識や歴史評価の価値基準においては戦時中と何ら変わるところがなかった。

問三 傍線部3「実証主義者」とあるが、筆者がこのことばを「でくくったのはなぜか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。」

ア 本来あるべき実証主義者と区別して、「歴史的真理」とは関係ない第二義的なことの実証に労力を費やしている者という意味で否定的にとらえられていたことを示すため。

イ 「歴史的真理」をめぐる論争に参加する、また参加できる歴史研究ではなく、非本質的なことに没頭し、意味のない研究をするという実証主義者の一面を強調するため。

ウ マルクス主義的歴史研究における課題を限定されたせまいものと感じ、別の「歴史的真理」を求める歴史観をもつ、一般的な実証主義者とは異なる研究者であることを暗示するため。

エ 歴史的事実の発見は「歴史的真理」の存在の証明にはつながらないと主張する実証主義者に対する、マルクス主義的歴史研究者の側からの皮肉をこめた呼称であることを提示するため。

オ 「歴史的真理」の存在を追究することについて、消極的にはあるが疑いをさしはさむという勇気ある研究者で、単なる実証主義者ではないことをはっきりさせるため。

問四 破線部①「旗印」②「釈然としない」の本文中での意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

① 旗印

ア 研究がかかげる歴史観による標語      イ 研究の根底にひそんでいる思想      ウ 研究の到達点として示す理想

エ 研究者が作る党派が戴く印章      オ 研究をささえる功利的主張

② 釈然としない

ア 鼻持ちならない      イ 頭を抱える      ウ 腑に落ちない      エ 目を覆う      オ 手に負えない

問五 傍線部4「絶対的な史料」とあるが、それはどのような意味か。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 過去の真理を伝える超越的な史料
- イ 重要な歴史的事実を確実に開示しうる史料
- ウ 客観的な検証を十分に経ている史料
- エ 存在を疑うことのできない史料
- オ 確立された歴史観を補強する史料

問六 傍線部5「歴史学者としての感性」とあるが、それはどのようなものか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 個々の歴史的事実にとらわれず、絶対的な歴史的真実を発見する感性
- イ わからなくなってしまう過去の重要な出来事を想像できる感性
- ウ 普通の歴史観では説明できない事実を史料から見出せる感性
- エ 歴史的真実はいつも小説より奇であることを認める柔軟な感性
- オ 過去の出来事を誤って認識させる不注意や怠惰をしりぞける感性

問七 波線部「歴史の真理」というのは、いかなるものなのか」とあるが、筆者は「歴史の真理」をどのように探究すべきものと考えているか。つぎの形式に従って三十字以上、四十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

「歴史の真理」とは、

ことよって探究すべきものである。

〔三〕 つぎの文章は『今鏡』の一節で、「成信の中將」と「重家の少將」の出家にまつわるエピソードを述べた部分である。これを読んで、後の問いに答えよ。

また村上<sup>1</sup>の兵部卿致平<sup>むねひら</sup>の御子の成信<sup>なりのぶ</sup>の中將、また堀河<sup>むら</sup>関白の孫<sup>まご</sup>にやおはしけむ、重家<sup>むねいえ</sup>の少將とて、左大臣のひとり子におはせし、もろともにも仏道<sup>ぶつだう</sup>に一つ御心に契<sup>くわい</sup>り申し給ひて、三井寺<sup>さんせいじ</sup>の慶祚<sup>きやうそ</sup>阿闍梨<sup>あせり</sup>の室<sup>むろ</sup>におはして、「世をそむきなむ」とのたまひければ、「名高くおはする君<sup>きみ</sup>たちにおはするに、びんなく侍りなむ」と否<sup>いな</sup>び申しけれど、かねて御髪<sup>みかみ</sup>をきりておはしければ、慶祚<sup>きやうそ</sup>阿闍梨<sup>あせり</sup>許<sup>ゆる</sup>し聞<sup>き</sup>こえてけり。照中將<sup>てらなかつ</sup>、光少將<sup>ひかるせう</sup>など申しけるとかや。中將は二十三、いまひとりは二十五におはしけるとかや。  
行成大納言<sup>ゆきなり</sup>の御夢に、重家<sup>むねいえ</sup>の消息<sup>そくしき</sup>とて、「世をそむきなむ」といふこと<sup>3</sup>のたまへりけるを、御堂<sup>みだう</sup>の大臣<sup>おんしん</sup>の御許<sup>みもと</sup>におはしあひて、「かかる夢こそ見侍りつれ」と語り聞<sup>き</sup>こえ給<sup>たま</sup>ひければ、少將<sup>せう</sup>うち笑<sup>わら</sup>ひて、「まさしき御夢に侍り。しか思<sup>おも</sup>ふ」などのたまはせける。次の夜、寺の大阿闍梨<sup>だいあせり</sup>の房<sup>むら</sup>へおはしたりけるとなむ。年<sup>とし</sup>ごろの御<sup>み</sup>ころざしのうへに、時<sup>とき</sup>の一人<sup>ひとり</sup>の人のわづらひ給ふだに、人もたゆむこと多く、世の頼<sup>たの</sup>みななきやうにおほえ給ふことの心細<sup>こま</sup>くおほえ給ひて、さばかり惜<sup>おぼ</sup>しかるべき君<sup>きみ</sup>たちの、その御年のほどこに思<sup>おも</sup>ほしとり、行<sup>ゆ</sup>ひすまし給<sup>たま</sup>へりし、あはれなどいふも、こともよろしかりしことぞかし。

(『今鏡』より)

【注】 \* 慶祚阿闍梨 平安時代中期の天台宗の僧で、三井寺に住した(九五五〜一〇一九)。

\* 行成大納言 藤原行成(九七二〜一〇二七)。藤原道長の信任厚く、諸種の才芸に優れた公卿として知られた。

\* 御堂の大臣 藤原道長(九六六〜一〇二七)。法成寺(御堂)を建立し、「御堂関白」などの通称がある。

\* 一人の人 摂政・関白など、朝廷で最上席の貴族のこと。



問一 傍線部1「おはし」2「聞こえ」3「のたまへ」4「給ひ」はそれぞれ誰に対する敬意を表しているか。最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 兵部卿致平    イ 成信の中将    ウ 堀河関白    エ 重家の少将    オ 左大臣    カ 慶祚阿闍梨  
キ 行成大納言    ク 御堂の大匠    ケ 成信の中将と重家の少将

問二 傍線部 i と ii の「なむ」の文法上の説明として正しいものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 強意を表す助動詞「ぬ」の未然形「な」に、推量を表す助動詞「む」がついたもの  
イ 強意を表す助動詞「ぬ」の未然形「な」に、意志を表す助動詞「む」がついたもの  
ウ 反語を表す係助詞  
エ 強意を表す係助詞  
オ 詠嘆を表す終助詞  
カ 他への願望を表す終助詞

問三 波線部 a「びんなく」b「消息」c「年ごろ」の現代語訳として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

a 「びんなく」

ア 具合が悪く      イ 手段がなく      ウ 便りがなく      エ 嘆かわしく      オ 恐ろしく

b 「消息」

ア 会話      イ 遺書      ウ 手紙      エ 風聞      オ 安否

c 「年ごろ」

ア 若年      イ 適齢期      ウ 年配      エ 多年      オ 先年

問四 二重傍線部「しか」は誰の、どのような行為を指すのか。十五字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問五 つぎのア、オについて、右の文章で述べられていることと合致するものには a を、合致しないものには b をそれぞれ解答欄にマークせよ。

ア 成信と重家は仲のよい兄弟で、いつも行動をともにしており、俗人であったときから仏道修行に励み、若くして出家した。

イ 成信と重家は髪を切った状態で慶祚阿闍梨のもとを訪れ、出家の決意の固さを示したため、阿闍梨は二人を受け入れた。

ウ 成信は二十三歳、重家は二十五歳で最期を迎え、世間の人々は彼らに照中将・光少将という名を贈り、その死を惜しんだ。

エ 行成は、御堂の大臣の邸宅で重家と出会って会話をする夢を見たため、翌日、慶祚阿闍梨の僧坊を訪れ、重家に面会を求めた。

オ 時の権力者が病気になるただけで、その人に対する忠勤を怠る世の頼りなさを見て、成信、重家の厭世観は深まった。

問六 『今鏡』と同じジャンルの作品をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 日本書紀

イ 吾妻鏡

ウ 古今著聞集

エ 平家物語

オ 栄花物語

〔四〕 つぎの各問に答えよ。

問一 つぎの各文のカタカナを漢字に直して、解答欄に記せ。

- 1 原油の価格がコウトウする。
- 2 苦しい胸の内をトロする。
- 3 絵馬を神社にホウノウウする。
- 4 大学合格のロウホウが届く。

問二 つぎの各文のうち、傍線部の表現または用法が適切なものにはaを、適切でないものにはbをそれぞれ解答欄にマークせよ。

- 1 先人の偉業を他山の石として見習い、私たちも努力を続けてゆきたい。
- 2 亡くなった先生の衣鉢を継いで学問に励む。
- 3 実際相手に別れ話を切り出したところ、けんもほろろに泣かれてしまった。
- 4 十年間親しくしてきたA君は、私の気のおけない友人だ。